
コンビニの行き帰りの間に幸せについて考えてみた

曾口十土

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コンビニの行き帰りの間に幸せについて考えてみた

【Nコード】

N6219H

【作者名】

曾口十土

【あらすじ】

僕の部屋で好き放題やってる里子。コンビニに弁当を買いにいく間に、僕にとって幸せなことって何かを考えてみた。そこにはたぶん、里子の姿がある。

僕のベッドで里子が眠っている。ミノムシみたいに毛布にすっぽり包まって。頭のとっぺんの黒髪が少しだけ見えるとこまで、ミノムシそっくりだった。

（なぜ他人の家であそこまで熟睡できるかなあ）

僕にはちよつと理解しがたい感覚だった。ゆつくりとしたリズムの寝息を聞いていると、こつちまで眠たくなる。

ここ2、3日、里子は親が旅行に行つて留守とかで、僕の家にあがりこんで好き放題やっていた。昨日なんか、どこからともなくプレーリードッグ（！）を拾つてきて、「飼いたい飼いたい」とわめいていた。ドングリのような瞳で台所の野菜くずを食べる姿には、一瞬心を動かされそうになったけど、指先の真つ黒な鉤爪でフローリングをがりがりやられたときに目が覚めた。今じゃ輸入禁止になっているこの動物を里子はどこから拾つてきたのだろう。

「なんかね、下水の排水溝のところをうるちよろしてた」

と、彼女は言つてた。嘘くさいことこの上ない。もしかしたら、里子は召喚魔法でも使えるのかもね。まあ、ペットショップから盗つてきた、とかじゃなければなんでもいいけど。

僕は里子の眠りを妨げないように注意しながら、するりと部屋を抜け出した。そろそろ夕飯の時間だけど、気持ちよく寝入ってる彼女を起こすのもかわいそうだから、コンビニに弁当でも買いに行こう。適当な服に安物のスニーカーを履いて、僕はマンションの階段を下りていった。

まだ六時過ぎなのにお日さまはとくに役目を終えていた。代わつて空には満月に近いお月さま。空に少しだけ湧き出ている雲が青く照らされている。月の光が冷気を運んでくるような気がして、僕は首をすくめて大股で歩いた。

里子と初めて会つたのも、こんなふうに月がぴかぴか光る夜だつ

た。もつとも、あのかきは蒸し暑い夏の夜だったけど。僕は暑さで寝つけずに、家の近くを散歩していた。里子がいたのは公園のブランコの上だった。

ブランコって普通、立つか座るかして乗るものなんだろうけど、里子はブランコの台の上に、器用に体育座りのような格好をして、小さく座っていた。しかも端のほうに。ブランコが傾いて、台を支える鎖が奇妙によじれて、そのなかで絶妙なバランスで座っていた里子の映像が僕の頭に焼き付いている。

今の好き勝手やっている里子からは想像もつかないけど、あのときは確かに落ち込んでいたんだろうな。それとも、ソウとウツが一枚のコインの表裏であるように、今の里子とあの時の里子も、簡単に入れ替わってしまうものなんだろうか。

電柱から飛び出た街灯が弱々しい光を投げかける。住宅街の細い道の上が、まるで安っぽい舞台の一部のように照らされていて、会社帰りのコート着たサラリーマンとか、バイトに出かけるにいちやんとか、買い物袋を提げたおばちゃんとかを浮かび上がらせていた。そういえば、里子にはあの時のことを改めて聞いたことはなかった。それだけじゃなくて、僕は里子の名字も知らなかったし、家がどこにあるのかも聞いたことがなかった。もちろん携帯の番号なんかも知らない。

里子はいつも、ふらっと僕の家遊びにくる。僕が買っておいたコーヒーを勝手に淹れて、僕のソファアを占領して、まるで王様のように振る舞う。だけど傍若無人ではなくって、たとえばコーヒーを淹れるときには必ず僕の分のコーヒー（ミルク入り）を用意するし、ソファアを占領するときはストーブ近くの温かいイスは空けておいてくれるのだ。だから僕は里子をうとましいと思ったことはなかった。むしろ里子が部屋にいる状況に安らぎを感じていた。

「いらっしやいませ」

コンビニ店員のアクセントが少しおかしいあいさつを受けながら、僕は店内に入った。里子は活動的なわりには少食だから、弁当を一

つとおにぎりが何個かを二人で分けあえば十分だ。

その前に立ち読みを、とマガジンラックに向かいかけた僕の目に、コンドームのパッケージがちらつとよぎった。自然と出かけに見たミノムシみたいな里子が頭に浮かぶ。思わず苦笑いしてしまった。僕の頭の中で、近いはずのその二つの物体が、どうしても結びつかなかった。僕だって年頃の男だから、そういうことに興味は津々だけど、里子に対してはあまり邪な気持ち湧いてこなかった。

「あれ？ 西原くん」

唐突に甲高い声をかけてきたのは、キレイに着飾った女の子だった。グレーのブーツにチェックのジャケット。明るいカラーリングの長髪が華やかな笑顔によく似合っていた。

「山村さん、久しぶり」

僕はうろたえながら山村さんに応じた。彼女は僕の高校の同級生で、写真部と一緒に活動していた。

二年前の僕は、山村さんのことがどうしようもなく好きだった。そして、一年半ほど前、僕は山村さんに告白し、二人は恋人になった。もともと、二人の関係はたった二週間だったけれども。

フラれた僕は、それ以来山村さんに顔を会わせていなかった。正直、あまり会いたい相手ではなかった。

「西原くんの家って、このあたりだったっけ？」

「うん、大学に入ってから部屋を借りたんだ。ここから歩いてすぐのマンション」

「そっか、いいなあ一人暮らし。好きなことやりたい放題だね」

「い、いや、そんなことないよ。一人で部屋にいても寂しいだけだし……」

僕の頭の中に、プレーリードッグを捕まえてきた時の里子のいたずらっぽい笑顔が浮かんできた。

「ねえ」

山村さんがにんまりと笑った。

「今度、西原君の家、遊びにいったいい？」

さっきのコンドームのパッケージと山村さんの顔がくやしいけど重なった。

「え……いいけど」

口に出した瞬間、僕は自分の愚かさを呪いつつも、心臓が大きく脈打った。そんな僕を見て、山村さんは艶やかに笑う。メスの虎が笑ったら、たぶんこんな感じだろうな。

「これ、わたしの番号とアドレスね」

慣れた手つきで手帳の切れ端に数字とアルファベットの羅列を書いて、僕の手に移した。そして僕も香水の匂いのする青いマジックで携帯番号を書かされた。番号交換というには、やや一方的過ぎるやりとりだ。

「それじゃ、また連絡するね」

白い手をひらひらさせながら、山村さんは去っていった。彼女、高校のときは楚々とした女の子だったけど、卒業してから変わったな。いや、正しく進化したと言ったほうがいいか。

いまでも鮮烈に憶えているけども、写真部で行った夏の登山合宿のこと。僕は山村さんと同じ組になって、花や雲、遠くの峰々の写真を撮っていた。そのうちに山村さんが「少し休憩しよう」というので、僕たちは木陰に入って座り込んだ。山の強い日差しが周りの木々や草花を鮮やかに作り出していて、僕はその色彩のコントラストに夢中になっていた。

突然、山村さんは緑に染められた草の上に白いＴシャツにジーンズの格好で寝転び、帽子を顔の上に被せた。彼女のスリムな体の線が草の上に浮かび上がり、それほど大きくない胸の膨らみがこれ以上ないくらいに強調されていた。大自然の中にいきなり出現したピナス像のような美しさに、僕はシャッターを切るのも忘れて、ただ自分の心臓のあたりを押さえていた。

あれが僕のいままで見た中で、一番美しい光景だった。いま僕の前からヒールを鳴らしながら去っていく山村さんは、確かに美しいけど作り物めいて見える。

やがてコンビニを出て行った彼女に、親しく笑いかけける男がいた。僕よりも背が高く、僕よりもガッチリした体格で、僕よりも年上の男だった。山村さんも嬉しそうに笑いながら話しかけ、二人で楽しそうに話しながら夜の町に消えていった。手をつなぎながら。僕はため息をつきながら、買い物に戻った。

まったく、進化しないのは僕だけらしい。

弁当とおにぎり数個を買って、僕はコンビニを出た。行き道も帰り道も同じルートなのに、帰りのほうがなぜか闇が深いような気がした。

山村さんは高校を卒業して、おそらく肉食獣に近いなにかになった。僕はあやうくハンティングさせそうになったってわけだ。そして、僕は高校のときから変わらず、気の弱い草食獣のままだった。このまま草食獣のまま大人になり、いつか誰かに食い荒らされて、その辺の路傍で骨になって一生を終えたりするんだろうか。いや、もしかしたら次の交差点で居眠りトラックが僕をめがけて突っ込んできて、そこで人生が終わるのかもしれない。

僕が死んだら誰か悲しむ？ 山村さんは、論外だな。父さんと母さんは悲しむよな。

(……)

そのくらいか。

「いまさら僕が死んだとしても 泣く人の数はたかがしれてる

弔いの花もすぐに枯れ果て 誰しも忘れてしまふんだろうな」

なんて歌があっただけ、じゃあだからといって、たくさんの弔いの花が絶えることなく捧げられ、いつまでも語り継がれるような人であれば、生きている価値と死ぬ意味があるんだろうか。未熟な僕には皆目見当もつかなかった。

——そっか。

たぶん、里子は僕が死んだら悲しむだろう。僕がトラックに轢かれて死んだら、誰よりも泣くのはもしかしたら里子かもしれない。なぜって、僕がいなくなったあとも、里子はあの部屋に遊びにき

そうだから。そして、一人で好き放題遊んだあとで、ソファアの片隅で小さく丸まって座っていそう。あの夏の公園のブランコのように。

たぶん、あの夏の夜も、里子はブランコの上で小さく丸まって泣いていたんだろう。

ぼんやり考えながら歩いていたら、あつというまに僕の部屋のドアの前だった。キーを取り出して開くと、ミートソースのいい匂いがお腹を刺激した。

「あ、ユージ、おかえり！」

玄関から続いた台所で、睡眠から目覚めた里子がなにやら料理をしていた。少し鼻にかかるような里子の独特の声を聞きながら、僕はなぜかほっと安堵していた。声だけじゃなくて、耳が隠れる程度の短い黒髪も、華奢な手足も薄い唇も、僕に安らぎを与えてくれた。「いなくなったのかと思っちゃった、へへ」

「コンビニに弁当買いに行ってたんだ。起こしちゃ悪いと思って」「起きたら、ユージがいなくてびっくりしちゃった。でも、帰ってきたらお腹減ってるだろうなあ、と思ってミートスパ作ってたの」「悪い、カブっちゃったな」

「うつん、いいの。何のお弁当？」

「唐揚げ弁当とおにぎりが何個か」

「ああ、じゃあさあ、ミートソース濃い目に味付けして、唐揚げにつけて食べようよ」

「え？ そんなの食べれるの？」

「わかんないけど、そんなに外れた味にはならないんじゃない？」

里子のいう「外れた味」っていうのがどんなのか、ちよつと想像もつかなかったけど、僕は里子に任せた。意外に里子は料理が上手くて、僕は何度か驚かされていた。

「ねえユージ」

「何？」

ミートソースにウスターと塩コショウを豪快に振りかけながら、

里子が僕を呼んだ。

「わたしね、じつは幽霊なんだよ」

「へえ、それは知らなかった」

菜ばしでぐりぐりかき混ぜながら、里子は言う。また妙なことを言い出したな、と思いながら僕は弁当のビニール包装を破いた。

「だから、わたしにとり憑かれた人は、みんな死んじゃうんだよ」

そういつて、里子はフライパンから手を離し、僕の背後に立った。するするっと里子の手が僕の肩に触れた。僕は思わず身を固くする。ふと、僕の首筋に柔らかくて温かいものがあたった。それが里子の唇だと分かる前に、彼女は首筋に歯を立てた。

僕は思わず声を漏らして笑った。

「里子、それはドラキュラ」

振り返った僕の目に、里子のきょとした顔が映りこんだ。しばらくして、里子は声をあげて笑いだし、さつきは優しく撫でていた僕の肩を何回も叩いた。

「ねえ、びっくりした？」

「しない。里子のヨタ話はいつものことだから」

僕はそっけない顔で嘘をついた。本当は里子の唇と歯がなぞった肌が粟立って、胸が鳴っていた。

もしかしたら、僕はとつくの昔から里子にとり憑かれていたのかもしれない。里子は僕の部屋の風景の一部になっていて、里子のいない生活なんて考えられなくなっていた。もしほんとうに里子が幽霊で、僕をとり殺してしまつとしても、そんな人生の終わり方も悪くないなと思えてしまふ。そうすれば、僕が死んでしまつても里子は泣かずにすみそうだったから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6219h/>

コンビニの行き帰りの間に幸せについて考えてみた

2010年10月8日15時12分発行